連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第⑨回

黒沼 ユリ子 氏（ヴァイオリニスト＆ライター）
――世界を見たから語り伝えたい

一般社団法人 洸楓座　代表理事 佐藤 建吉

▼序章

2021年6月4日、今回の挑戦者、黒沼ユリ子氏は81歳になった。まだまだ続く人生ではあるが、これまでの歩みは、普通の人とは異なり、それは一歩一歩、自身が歩を進めて来たものであった。しかも、その歩先は前に、しかもより高く。

西洋音楽、とりわけヴァイオリンとの関わりの人生であったが、いつしか多くの人、その関わりの地、さらに共有する人生となった。それは、特別の人、異郷の地、さらには多くの国々での経験となった。さらに言えば、音楽家は、芸術家であり、表現者であるがゆえに、自身のその時の感性や感情を伝える宿命をもつ。したがい過去～現在～未来の時空と常に関わる。そのとき、その人は哲学者になる。そんな人格を、いま黒沼ユリ子氏、その人に見出した。今回、筆者は、黒沼ユリ子氏自身の人生を、文字の楽曲として記してみたい。

黒沼ユリ子氏近影

▼第一楽章　東京

1940年6月4日、ユリ子は4人兄姉の末っ子、三女として生まれた。黒沼家は、父が円タク（当時の黒塗りタクシー）で東京駅近くの赤煉瓦ビルまで通勤していた家庭で、その父は幼い頃、両国教会に通い賛美歌を聴き、西洋音楽のファンとなった。が、時代は戦争末期。空襲が一家を襲う。幡ヶ谷に家はあった。姉は疎開したが学齢前のユリ子は、火の川になった甲州街道を母に背負われて横切ったことが記憶に残る。

戦後となり、幸い家族は無事。8歳のクリスマスの日、父がヴァイオリンをプレゼントしてくれた。稽古に阿佐ヶ谷まで通った。父が電車で連れて行ってくれた。スズキ・メソードで有名な鈴木鎮一先生の教室「才能教育研究会」でレッスンを受けた。その後、鷲見三郎先生に習った。負けず嫌いのユリ子はめきめき腕を上げた。恵泉女学園中学の2年で、日本音楽コンクールで2位になった。中学3年では、桐朋のオーケストラに入りオーケストラでの演奏体験もした。

斎藤秀雄先生の勧めで、高校は桐朋学園に進み、日本音楽コンクールで1位／特賞を受賞した。それまでは奨学金を得ていたが、もはやプロということで、奨学金の支給は打ち切られた。そんなおり、高校3年の9月に、チェコスロバキア政府招待給費留学生の募集を知った。高校卒業以上が応募資格であったが、高校卒業見込みで可としてくれ、受験、見事、音楽部門の3名の中に合格した（もう1名は、言語学の枠であった）。

その年11月、高校在学中であったが単身、パリ経由でチェコに渡航した。気が付けば、ユリ子は早くも日本を離れ、脚はヨーロッパに立っていた。

▼第二楽章　プラハ

プラハは、チェコスロバキアの首都である。プラハでは、音楽芸術アカデミーに就学し寮生活となった。フランティシェック・ダニエル教授が、その音楽学部長で、ヴァイオリン奏者であった。日本から来た孫のような女の子の腕前をと、演奏を促した。ユリ子は、バッハの「シャコンヌ」、さらにチャイコフスキーやパガニーニの曲も暗譜で弾きこなした。ダニエル先生は、ユリ子を弟子にするとした。同先生の指導方法は、日本でとは異なり、先生がピアノ伴奏をして、楽譜をいかに表現するかを教えた。その後、ユリ子も、ヴァイオリンの演奏家、そして指導者ともなったが、「印刷された音符からいかに音楽を引っ張り出すか」、その神髄を教わった。

プラハにはいまでも続くスメタナの命日5月12日から始まる「プラハの春」という国際音楽祭がある。チェコの人々、スラブ民族は音楽が好きである。プラハには三つもオーケストラがあり、多数の演奏会が開かれる。演奏者が有名か無名かではなく曲目が関心で、それを聴きに行く。見る目ではなく、聴く耳の持ち主たちの国民である。

その伝統は、チェコスロバキア、あるいはスラブ民族の国情がつくった。第2次世界大戦後は、社会主義体制になったが、多民族・多言語の国家が並立するヨーロッパの中にあり、政治的な発言はご法度という背景があった。が、音楽は、共通言語であり、民族の歴史や精神をも表現し、共感することが出来る。音楽は世界の共通語であることを、チェコで学んだ。それは、チェコの人は何で音楽が好きなのかの答えでもあった。

そんな折、ユリ子はメキシコからの留学生と出会った。その男性は、カレル大学で考古学を学ぶリカルド・フェレー。音楽しか知らなかったユリ子は、歴史・社会・文学・美術・演劇・政治などが、いかに人生において重要であるかを、彼との現地旅行や体験を通して学んだ。結果、1960年12月、20歳のとき、メキシコ人の博士課程学生と結婚した。

それでもユリ子は、ヴァイオリンはしっかりと習熟し、アカデミーも通常は4年で卒業のところ3年で繰り上げ修了した。しかも、その仕上げには、前述した伝統の「プラハの春」で栄誉ある演奏する機会が与えられた。1962年、ユリ子はチェコに3年半暮らし、夫とともにメキシコに、新天地を求めて出発した。

▼第三楽章　メキシコ

メキシコは親日国である。19世紀末からメキシコに多くの日本人が移住し夢を託した。その人々が真面目であったので、メキシコでは日本人の評判がいい。夫のリカルド・フェレーも日本人のお嫁さんを連れて来たと評判になり、ユリ子も優しく迎えられた。が、メキシコは多民族国家であり、社会的身分や暮らし向きに大きな差がみられる。豊かな人、あるいは貧しく旧来の生活をしている人もいる。

間もなくユリ子は、夫が東京大学で研究することになり、日本に2年間滞在した。その時期に息子のリュウが誕生した。3年して再びメキシコに戻ったが、縁がありシカゴの大学で2年間暮らした。その後は、ウィーンで暮らした。ヨーロッパでの生活に退屈していたとき、メキシコの中央部に夫の仕事ができ、暮らすことになった。ユリ子は、1980年秋、メキシコシティにNPO音楽院「アカデミア・ユリコ・クロヌマ」を開設し、弦楽器教育と日墨文化交流に努めた。アカデミアの生徒たちを連れて日本公演なども行い、日本とメキシコの架け橋を築いた。この活動は文化交流に貢献したとして、ユリ子は「アステカの鷲勲章」を1986に受章した。

この間、ユリ子夫婦は合意の下で独立した仕事を行っていたが関係は疎遠となったので、1988年に離婚した。その後、メキシコで、イベントプロデューサーの渡部高揚氏と出会い、日本人としての親近感をもち、パートナーとして人生を協働することにした。渡部氏は、世界中から「ヴァイオリンを弾く人形」をコレクションしてくれた。その後、母も東京からメキシコで滞在するようになり、ユリ子はメキシコの暮らしに満足していた。

しかし時間の経過は、アカデミアにもかげりが出て来た。アカデミアでは、音楽の基礎をしっかりやり、国際的友好の場にすることも、教育理念として実践していたが、次第に単なる音楽教室化してきた。恒例としていた訪日コンサートの実現も難しくなってしまった。アカデミアを巣立った人数は、25周年を迎えた2005年には累計1000人以上となり、中からは著名な演奏家も誕生していたが、いよいよアカデミアを閉じる決意をした。

「ヴァイオリンの家」の前で黒沼姉妹

▼第四楽章　御宿

2014年、74歳になるユリ子は、千葉県御宿町に引っ越した。御宿はメキシコと友好都市で、その由来はいまから400年以上も前に遡る。1609年にメキシコの帆船サン・フランシス号がフィリピンから帰航のおり台風に遭い、御宿の岩和田海岸沖に座礁した。地元の漁民や海女たちが、乗員317名を救護したことに由来する。日墨友好の拠点とし、ユリ子は2016年9月に「ヴァイオリンの家」をオープンした。真っ青な壁面の3階建て、明るく象徴的である。1階は図書館と談話室。2階と3階の展示室には、50歳で伴侶となった渡部氏が収集した900点を超える「ヴァイオリンを弾く人形たち」が展示されている。渡部氏は、その展示を見ることなく2015年に、メキシコで急逝した。人生は不惑であるが、御宿での日墨友好の絆は地元民との関わりで生まれ強くなっている。

ユリ子は、80年の人生で、ヴァイオリンを通して多くのことを学んだ。いま為すべきことは、自身が体験し、学び、思索したことを伝えることである。その方法はもはやヴァイオリンではなく、文筆や講演で。子供たちには絵本で語ることにした。これまでもいくつかの書籍があるが、この6月には、『ゆびのこと、しってる?』という絵本が出版される。この絵本の絵は、ユリ子が小学5年の時、絵を描く喜びを教えてくれた図工の大西三朗先生が描いてくれた。現在93歳であるが、優しさに満ち機知に富んでいる。

結びに、ユリ子の人生は、書名にもある次の言葉、「アジタート・マ・ノン・トロッポ」（激しく、しかし、過ぎずに）で、協奏される。

【文献】
①黒沼ユリ子、『アジタート・マ・ノン・トロッポ』、未来社（1978）
②黒沼ユリ子、『メキシコからの手紙』、岩波新書（1980）
③黒沼ユリ子、『メキシコの輝き』、岩波新書（1989）
④黒沼ユリ子、『ドヴォルジャーク』、冨山房インターナショナル（2018）
⑤黒沼ユリ子、『黒沼ユリ子 ヴァイオリンで世界から学ぶ』、平凡社（2019）
⑥黒沼ユリ子、『ゆびのこと、しってる?』（ユリ子おばちゃんのおしゃべりえほん）、冨山房インターナショナル（2021）